

■仮名: Kさん

■年齢: 30歳

■性別: 女性

## ＜続編＞「いじめ」～家にも学校にも居場所がない②～

## 【生きるための過食嘔吐】

Kさんが過食嘔吐を繰り返すようになったのは、高校2年の頃だ。転校先でクラスの部活仲間達からいじめに遭い、部活に行けなくなったKさんは、学校から帰宅するとすぐに部屋にこもり、ただひたすら食べ物を食べまくることに没頭した。目の前の食料を食べ尽くしては、口に指を突っ込んでトイレで吐く…という行為を日常的に繰り返していたため、皮膚が胃酸にやられ、手には“吐きだこ”ができていたという。嘔吐を続けることが身体に負担をかけていることもわかっていたが、やめられなかったと一。一方、事業に失敗してから仕事の目途が立たない父親は、一日中テレビを見ながら酒浸りになり、貯金を切り崩してパチンコ通いをするようになった。パチンコで負けた日はいつも以上に機嫌が悪く、母親に手を挙げて八つ当たりするようになっていった。そんな一家の収入は、働かない父親に代わり、母親が朝から晩までパートを掛け持ちして稼いだという。しかも父親は、Kさんが幼い頃から母親の不在時を見計って性的虐待を繰り返してきた。Kさんが成長するにつれてその行為はエスカレートしていく。ある日、肉体的にも精神的にも耐えきれなくなったKさんは、その事実を母親に打ち明けた。「お母さんはなんて答えましたか?」。こちらの問いかけに対しKさんは、「母親は話を途中で遮って、『パパがそんなことするわけないでしょ。くだらない。』って。結局、信じてもらえなかった。」と自嘲気味に語った。それでも、Kさんはそんな針の筵から脱するため、救いを求めて当時の担任に虐待の事実を打ち明けたという。しかし、担任から返ってきた言葉は、「ご両親がそんな事をする人にはとても見えない。PTAにも協力的だし…信じてあげられなくてごめんね」担任は、Kさんからの相談を淡々とかわしたという。Kさんによれば、父親は昔から外面が良くて口が巧かったため、家庭の内情をよそに話したところで理解してくれる人はいなかったという。その後、Kさんは周囲に対して希望を持つことを一切やめ、高校を卒業して家を離れるために休まず学校に通い続けた。

## 【未来へ託す希望】

高校3年間、Kさんはどこへ逃げることもできなかった。当時の環境に過剰適応する反動から、リストカットやオーバードーズなどの自傷行為を繰り返すようにもなったという。現状に希望が見出せない分、Kさんは卒業後の未来に希望を託して自分を信じるしかなかったという。何故学校を辞めなかったのか聞くと、Kさんはしっかりと口調で、「ここで退学したら看護師になる夢も遠退いてしまうと思って。今はつらくても、絶対に諦めないと決めていました。」と語った。Kさんは高校卒業後、奨学金を受けて実家から離れた町の看護学校に通い、3年後には晴れて正看護師になった。Kさんに今の状況を尋ねたところ、「日々夢中で看護の仕事にあたるうち、いつの間にか摂食の問題は薄れていきました。」と話す。看護師になり、人との関わりから得られることの大きさに気づいたという。人のなかで温かさを知り、信頼関係を築くことで、以前のように必死で自傷行為や過食をする必要はなくなったのかもしれない。かつて、部活という活躍の場を失い、どこにも居場所がなかったKさんだったが、過去を乗り越えたからこそこの“今”があるのだろう。

## 【もう一つの現実】

Kさんの場合は、自分の意志で道を切り拓いてきた。現在は病院のデイケアも担当し、過去の自分と同じ摂食障害で苦しむ人たちのケアにもあたっているということだ。今も、いじめの事実を知りつつ、“無関心”“知らぬ存ぜぬ”を貫く学校の体質が、問題解決には大きな障壁となっている実態がある。そして、家庭での虐待の事実はさらに外に漏れにくく、齧られて口止めされている場合も多い。仮に外に助けを求めても、Kさんのように相手にされないこともある。話を聞く大人側は、真実を見極める冷静さと勘も必要だ。いじめは決して容認・擁護できるものではない。しかし、いじめる側の背景にも目を向ける必要はある。家庭内、生育過程で置かれている状況、もとを辿ればどこに行きつくのか。表面的な「いじめ解決」ではなく、加害者をつくらないための未然防止も重要だ。親子関係の基盤、子どもの実情を汲み取って受けとめてくれる人との信頼関係があるかないかも、子どもの成長には大きく影響してくる。大人が関心を持つこと、家で起きたことを話せる安全な居場所と、信頼できる大人の存在が必要でもある。